

多次元共感性尺度 (MES) の作成

—— 自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて ——

鈴木 有 美* 木 野 和 代**

本研究の目的は、共感性の多次元的アプローチに従い、他者の心理状態に対する認知と情動の反応傾向をそれぞれ他者指向性—自己指向性という視点から弁別的に測定しうる多次元共感性尺度 (MES) を作成し、その信頼性と妥当性を検証することであった。先行研究における概念定義の議論および既存尺度の構成を概観し、「他者指向的反応」「自己指向的反応」「被影響性」「視点取得」「想像性」の5つの下位概念を設定した。これらを測定する項目を作成し、質問紙調査を実施した。大学生 871 名から得られた回答について因子分析を行った結果、5つの下位概念に対応する5因子が得られた。 α 係数、I-T 相関係数、再検査信頼性係数などの結果から信頼性を検討した。また、既存の共感性尺度および共感性との関連が予想される概念を測定する尺度との相関から妥当性を検討した。今後、自我発達との関連など認知・情動反応傾向の指向性を規定している要因の検討を進めることが、共感性に関する応用研究において有益と考えられる。

キーワード：共感性、多次元尺度、自己・他者指向性、信頼性、妥当性

問題と目的

本研究では、他者指向性—自己指向性の弁別に焦点を当て、共感性の情動的所産と認知的過程の生起に関わる個人傾性を測定する多次元共感性尺度 (Multi-dimensional Empathy Scale : MES) を作成する。そして、既存尺度や他の関連する概念との相関関係からその妥当性を検討することを目的とする。

従来の共感性の概念定義には、他者の心理状態を正確に理解する点に重きをおく認知的定義と、他者の心理状態に対する代理的な情動反応を強調する情動的定義が存在していた。しかし近年では両側面を統合し、多次元的な構造で捉える見方が定着している (レビューは Davis, 1994 菊池訳 1999 ; Eisenberg & Strayer, 1987 参照)。特に性格特性としての共感性を測定する指標については、この多面的・多次元的なアプローチに従った質問紙が積極的に開発されている。中でも Davis (1980, 1983a) により作成・妥当性検討された対人反応性指標 (Interpersonal Reactivity Index : IRI) は、現在最も頻繁に用いられる測度の一つである。

IRI は、自発的に他者の心理的観点をとらうとする

傾向を表す「視点取得 (Perspective Taking : PT)」, 架空の人物の感情や行動に自身を投影して想像する傾向を表す「想像性 (Fantasy : FS)」, 他者に対する同情や配慮など他者指向的な感情に関する「共感的配慮 (Empathic Concern : EC)」, 他者の苦しみ場面における不安や不快など自己指向的な感情に関する「個人的苦痛 (Personal Distress : PD)」の4下位尺度から構成される。日本では桜井 (1988), 菊池 (Davis, 1994 菊池訳 1999), 明田 (1999) らによって邦訳版が作成された。しかし、IRI を有用性の高い指標とみなすにはいくつかの問題点がある。

第1に、IRI の PD 尺度を構成する項目が「自己指向的な」情動反応を測定していると言い難い点である。Davis (1994) の組織的モデルによれば、他者の心理状態を推測・理解した結果生じる情動的所産は、並行的所産と応答的所産の2つに大別される。前者は、「不安感を示す他者を見て自分も不安になる」など観察他者の感情をそのまま再生するものである。後者は、「不安感を示す他者を見て憐れみや怒りを感じる」など他者の感情と必ずしも同じでなくとも広い意味で対応した感情の経験を意味し、さらに他者指向的反応と自己指向的反応に分けられる (Table 1 参照)。IRI の PD 尺度は、この応答的所産の自己指向的反応を測定するために作成されたが、妥当性検討において満足な支持は得られず (Davis, 1983a), 自己—他者の指向性の違いについてはその後明示されていない。

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 (現所属：中部大学教養教育部教職課程 (非常勤))

yumi_suzuki@sti.chubu.ac.jp

** 広島国際大学心理科学部

k-kino@he.hirokoku-u.ac.jp

Table 1 多次元的アプローチにおける共感性の下位概念の位置づけ

	認知面	情動面	
		並行的所産	応答的所産
他者指向性	視点取得	被影響性	他者指向的反応 (共感的配慮)
自己指向性	想像性		自己指向的反応 (個人的苦痛)

しかし、指向性の弁別は指標の有用性を高めるために無視できない課題である。なぜなら、特に情動反応の指向性を重視する研究領域も存在するからである。例えば、向社会的行動研究において Batson (1987), Batson, O'Quin, Fultz, Vanderplas, & Isen (1983) は、当時優勢であった「全ての援助行動は本質的に利己的である」という見解を批判し、援助行動には愛他的な動機と利己的な動機があり、愛他的な情動反応である共感的配慮と利己的な情動反応である個人的苦痛がそれぞれ対応することを仮定し一連の実験を行った。また、IRI の開発以降、実験的な操作以外に質問紙の評定結果を用いて指向性を弁別する研究もある (Eisenberg & Miller, 1987 参照)。よって、他者指向的な EC 尺度と自己指向的な PD 尺度という指向性の弁別について改良された測度の開発は、この研究領域のさらなる展開に貢献するものである。

第2に、IRI の PD 尺度が「応答的所産」を測定しているのか疑わしい点である。個人的苦痛は、研究者によって並行的所産とも応答的所産とも定義されうる概念である。すなわち、観察者と観察他者の感情の類似の程度からみれば、両者の感情が同じであれば並行的所産、異なれば応答的所産となる。あるいは、観察者の認知活動の程度からみれば、単に情動が感染した場合のように思考を必要としないものは並行的所産、相手の感情に対して何か思考した上で生じたものは応答的所産となる。ただし IRI では、相手と全く同じ感情ではなく、同じような方向であっても区別できる場合があるとの理由から、応答的所産と定義されている (Davis, 1994)。しかし PD 尺度には、突発の出来事などに遭遇すると「どうしようもなくなる」「取り乱してしまう」といった表現が多く、応答的所産ではなく並行的所産を測定しているとも考えられる。

さらに、PD 尺度の項目は、EC 尺度や他の共感性尺度の項目と比較してみても問題があると言わざるを得ない。例えば、PD 尺度はほとんどが緊急の事故や突発の出来事に対する反応傾向をたずねており、必ずしも

他者の苦痛を想起させるとは限らない。「誰かが傷ついているのを見ても平静でいられる (逆転項目)」は例外であるが、個人的苦痛よりはむしろ共感的配慮のなさ、あるいは情動反応傾向のなさを測定している可能性がある。また、IRI 以前に開発された Mehrabian & Epstein (1972) の情動的共感性尺度 (Questionnaire Measure of Emotional Empathy : QMEE) では、「私は人がうれしくて泣くを見ると、しらけた気持ちになる」など他者の快感情に対する否定的な反応傾向を測定する項目も選定されていたが、PD 尺度には含まれていない。共感性を広く「他人の経験についてある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念 (Davis, 1994 菊池訳 1999, p.15)」と定義するのであれば、当然他者の成功に対して妬みや焦りを感じるといった項目も個人的苦痛として想定されうる。

これら IRI の PD 尺度における問題に対する解決案は、(a) 個人的苦痛の項目選定において、他者の苦痛に対する反応傾向に限定せず、自己指向的な応答的所産を測定しようよう配慮し、(b) 新たに並行的所産を測定する下位尺度を作成し、応答的所産と弁別することである。

ただし(b)については、観察他者の感情をそのまま再生するという並行的所産の定義に忠実に従った項目を作成しても、測定上では理論上ほど明確に弁別されるとは考えにくい。代わりに候補となるのが、元来共感性に包含されていた他者の心理状態に対する素質的な「感受性」「被影響性」などと呼ばれる反応傾向である。例えば QMEE は、「情動的感染への感受性」や「極度の情動的反応性」といった構成要素も含めて作成されており、日本版 QMEE を作成した加藤・高木 (1980) は、因子分析の結果「感情的暖かさ」と「感情的冷淡さ」に加えて「感情的被影響性」の3因子を抽出している。被影響性は、共感的配慮や個人的苦痛などの経験的な反応傾向に比べれば多分に気質的なものである。すなわち、周囲に対して感情的に反応しやすい者は、そうでない者よりも他者の心理状態について小さな刺激でも反応し、感情的に影響を受けやすい。この反応しやすさは並行的所産として捉えられ、高次の認知過程を伴う応答的所産とは区別される。そこで本研究では、IRI では想定されていない被影響性を、応答的所産である個人的苦痛とは異なる下位概念として組み込むこととした。

以上、特に IRI の PD 尺度に関する問題点について述べてきたが、FS 尺度の位置づけが明確でないことも問題点として挙げられる。FS 尺度は、認知傾向を測

定するため作成されたにもかかわらず、PT 尺度より EC 尺度との相関が高く、気質的な情動性とも関連するとの結果から情動的指標と結論づけられ、その後の研究では利用されないことも多い（例えば Davis, 1983b ; Davis, Hull, Yong, & Warren, 1987）。しかし、想像性を情動的指標とするのは早計である。共感性は、その用語自体ドイツ美学で使われていた観察対象への自己の投影を表す「感情移入 (Einfühlung)」からきており、運動模倣を通して作品を理解する手段と考えられていた (Wispø, 1986)。よって、観察対象（他者）を理解する手段と考えれば、想像性は明らかに認知的定義に沿っている。

FS 尺度の位置づけを明確にするためには、情動的側面について提議した指向性の弁別という観点を認知的側面にも適用することが有効と考えられる。すなわち、「他者指向的な」認知傾向としての視点取得と「自己指向的な」認知傾向としての想像性という関係を想定する。想像性は、他者の立場に自己を置くという点において、視点取得と同様の認知過程である。ただし、視点取得は観察対象である他者の理解が目的であり、そのため自己中心的な考えを抑えて相手の立場を受け入れることが求められる他者指向的な認知過程である。これに対し、想像性は観察者である自己を理解することが目的の自己指向的な認知過程であると仮定できる。なぜなら、自己を架空の人物に投影させるのに自己中心的な考えを抑える必要はなく、むしろ「自分ならこう感じる」と積極的に働かせることが必要となるためである。

従って本研究では、認知的側面として他者指向的な視点取得と自己指向的な想像性、情動的側面として他者指向的な応答的所産の共感的配慮と自己指向的な応答的所産の個人的苦痛、および並行的所産の被影響性の 5 下位概念からなる共感性尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討する。

方 法

調査対象・調査時期・手続き

愛知県内の 5 つの四年制大学に通う学生に対して、2003 年 10 月から 2006 年 2 月の間に 5 回にわたって質問紙調査を実施し、30 歳未満の回答者を分析対象とした。内訳は、1 回目調査 174 名（男 110 名、女 64 名； $M=19.82$ 歳、 $SD=1.08$ ）、2 回目調査 210 名（男 119 名、女 91 名； $M=19.75$ 歳、 $SD=1.05$ ）で、このうち 141 名が両方に回答した¹。3 回目調査以降は、順に 168 名（男 79 名、女 89 名； $M=19.67$ 歳、 $SD=1.17$ ）、144 名（男 45 名、女 99 名； $M=19.05$

歳、 $SD=0.80$ ）、347 名（男 138 名、女 209 名； $M=18.87$ 歳、 $SD=1.13$ ）であった。調査用紙は、各自が自宅へ持ち帰って回答し、後日回収された。

調査内容

本論文での分析対象とした測度のみ以下に記載する。(1) は全 5 回の調査において実施し、(2)～(12) はいずれかの調査において実施した。

(1) **MES** 「視点取得」「想像性」「共感的配慮」「個人的苦痛」「被影響性」の 5 下位概念を設定した。尺度項目は、鈴木・木野・出口・遠山・出口・伊田・大谷・谷口・野田（2000）の研究において収集・作成された約 300 の項目プールから選定した。選定の基準として、他者の苦痛に限定せず快感情も含めて他者の心理状態に対する反応傾向を測定すること、他者指向的な共感的配慮と自己指向的な個人的苦痛を反映する応答的所産傾向を測定すること、被影響性は自己指向的な他者指向的なでもなく、他者の心理状態に対する素質的な巻き込まれやすさを測定するものであること、他者指向的な視点取得と自己指向的な想像性を反映する認知傾向を測定すること、に留意した。各 5 項目、5 件法。

(2) **IRI** 菊池 (Davis, 1994 菊池訳 1999) による翻訳版を使用した。「PT」「FS」「EC」「PD」各 7 項目、5 件法。MES の対応する下位尺度とそれぞれ正に相関するが、個人的苦痛は関連が弱いと予想する。

(3) **QMEE** 加藤・高木 (1980) による日本版を使用した。「感情的暖かさ」10 項目、「感情的冷淡さ」10 項目、「感情的被影響性」5 項目、7 件法。感情的暖かさは共感的配慮と正に相関すると予想する。感情的暖かさと感情的冷淡さの負の相関が報告されていることから、感情的冷淡さは共感的配慮と負に相関すると予想する。また、感情的被影響性が被影響性と正に相関すると予想する。

(4) **自己意識尺度** 菅原 (1984) による日本版を使用した。「私的自己意識」10 項目、「公的自己意識」11 項目、5 件法。IRI の検討 (Davis, 1983a ; Davis & Franzoi, 1991) において自己指向性を測る尺度として採用されていることから、いずれも想像性や個人的苦痛と正に相関すると予想する。

(5) **没入尺度** 坂本 (1997) の自己フォーカスの強さと持続性の個人傾性を測定する尺度を使用した。「自己没入」11 項目、「外的没入」8 項目からなるが、本研究では前者のみを使用した。5 件法。自己指向性の観点か

¹ この 141 名のデータを後述の再検査信頼性の分析に用いた。因子分析と下位尺度間の相関分析には 2 回目調査の回答のみを使用した。

ら想像性や個人的苦痛と正に相関すると予想する。

(6) **自尊感情尺度** Rosenberg (1965) の尺度を邦訳して使用した。10 項目, 5 件法。IRI との関連 (Davis, 1983a) 同様, 視点取得と正に相関し, 共感的配慮と無相関であると予想する。また, IRI では PD と負に相関する結果が見出されているが, MES では被影響性と負の相関関係にあると予想する。

(7) **個人志向性・社会志向性 PN 尺度** 伊藤 (1993, 1995) の自己概念を形成する際の基準の方向性を測定する尺度を使用した。「肯定的な個人志向性」8 項目, 「肯定的な社会志向性」9 項目, 「否定的な個人志向性」6 項目, 「否定的な社会志向性」7 項目, 5 件法。他者指向性の観点から肯定的社会志向性が視点取得や共感的配慮と正に相関すると予想する。被影響性は, 同調・他律的な在り方を捉える否定的社会志向性と正に, 自己実現を終局とする肯定的個人志向性や自分中心的な在り方を捉える否定的個人志向性と負に相関すると予想する。

(8) **愛他行動尺度** Rushton, Chrisjohn, & Fekken (1981) の尺度 (20 項目) を菊池 (1988) を参考に邦訳し, 菊池の大学生版向社会行動尺度から 5 項目を加え, 表現を揃えるため改変した上で, 25 項目からなる愛他行動尺度を用意した。各行動について「経験頻度」「(実際の経験に関係ない) 精神的負担」, 5 件法。他者指向性の観点から視点取得や共感的配慮と経験頻度は正の, 精神的負担は負の相関関係があると予想する。自己指向性の観点から想像性や個人的苦痛と精神的負担は正に相関すると予想する。しかし, 負担を感じつつも利己的な理由により実際に援助行動をとる者が存在する (Batson et al., 1983) ことから, 経験頻度とは関連しないと予想する。また, 向社会行動は QMEE の感情的被影響性との無相関が報告されていることから, MES でも被影響性とは無相関であると予想する。

(9) **Buss-Perry 攻撃性質問紙** 安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井 (1999) による日本版を使用した。「短気」5 項目, 「敵意」6 項目, 「身体的攻撃」6 項目, 「言語的攻撃」5 項目, 5 件法。他者指向性の観点から視点取得や共感的配慮と負に相関すると予想する。また, 文章完成法では他者の不幸を喜んだり他者の幸せを妬む記述をした者の敵意の得点が高かったと報告されており, 敵意が個人的苦痛と正に相関すると予想する。言語的攻撃は, 対立場面における強い自己主張を測定する項目からなり, 被影響性と負に相関すると予想する。

(10) **社会的スキル尺度** 菊池 (1988) による尺度を使

用した。18 項目, 5 件法。視点取得は社会的スキルを発揮するために必要な能力であると考えられるため, 正の相関関係があると予想する。また, 項目内容から被影響性と負に相関すると予想する。

(11) **5 因子性格検査** 和田 (1996) による尺度を使用した。「外向性」「神経症傾向」「開放性」「誠実性」「調和性」各 12 項目, 5 件法。外向性や調和性は他の人格検査に含まれる共感性と関連する (Shafer, 1999 ; 和田, 1996) ことから, 共感的配慮と正の相関関係があると予想する。また, 項目内容から神経症傾向が被影響性と正に相関すると予想する。

(12) **社会的望ましき尺度** 北村・鈴木 (1986) による短縮版を使用した。10 項目, 2 件法。共感的配慮や視点取得とは関連しないことが望まれる。

結 果²

MES の構成

まず, MES の各項目について反応率の偏向を検討し, ある評定値に 50% 以上が偏る項目はなく, また肯定率 (「とてもよくあてはまる」と「ややあてはまる」を併せた割合) あるいは否定率 (「全くあてはまらない」と「あまりあてはまらない」を併せた割合) が 80% を超える項目もないことを確認した。

次に, 因子分析を行った。初期解として主成分分解を採用し, その固有値の減衰状況とそれに基づくプロマックス回転解の因子負荷量の解釈可能性から, 最終的に 5 因子解を採用した。その結果, 当初想定していた下位概念を測定する項目群がそれぞれ因子としてまとまった。第 1 因子は他者の感情や意見に影響されやすい傾向を表す「被影響性」, 第 2 因子は他者に焦点づけられた情緒反応を示す「他者指向的反応」, 第 3 因子は自己を架空の人物に投影させる認知傾向を表す「想像性」, 第 4 因子は相手の立場からその他者を理解しようとする認知傾向を表す「視点取得」, 第 5 因子は他者の心理状態について自己に焦点づけられた情緒反応を示す「自己指向的反応」, とそれぞれ命名した。第 5 因子は IRI の個人的苦痛に対応するものであるが, 「自分はそうなりたくない」「自分の身に起こったことでなくてよかった」など, 苦痛に限らない反応傾向を含むため「自己指向的反応」と命名した。これに応じて, IRI の共感的配慮に対応する第 2 因子も「他者指向的反応」と命名した。

下位尺度得点は, 評定値が高いほど当該の特性が強

² 分析には, 全て SPSS (version 11.5J) を利用した。

いことを示すよう逆転項目の得点処理を行い、各因子を構成する項目の合計を項目数で除算して算出した。その際、自己指向的反応の1項目（PD5「15. 痛みに苦しんでいる人を見ると、気持ちが悪くなる」）は、因子負荷量、 α 係数、項目一下位尺度間（I-T）相関（ $r=.13$ ）などの内的整合性の観点から除外した。この項目を除外した後の因子分析結果をTable 2に示す。 α 係数は、順に.78, .71, .70, .69, .60となった。各下位尺度得点の分布および下位尺度得点間の散布図において、特に大きな偏りや外れ値はみられなかったことから、ここ

で算出された下位尺度得点を今後の分析に用いることとした。1回目調査と約6ヶ月後に実施した2回目調査の両方に回答した141名を対象とした再検査信頼性は.68～.74であった（Table 3）。

MESの下位尺度間の関連については、分析対象者が871名と多いため全ての下位尺度間に有意な相関関係が認められたが、絶対値が.20を超える相関係数のみに着目すると、他者指向的反応と視点取得（ $r=.36$ ）、自己指向的反応と想像性（ $r=.21$ ）および被影響性（ $r=.25$ ）に関連がみられた（Table 3）。

Table 2 多次元共感性尺度（MES）の因子パターンならびに因子間相関（プロマックス回転解）

			F1	F2	F3	F4	F5	M	SD
<第1因子：被影響性>									
SE1	2	まわりの人がそうだとすれば、自分もそうだと思えてくる。	.78	-.02	.02	-.05	-.06	3.08	1.08
SE2	16*	自分の信念や意見は、友人の意見によって左右されることはない。	-.78	.02	.06	-.02	.12	3.03	1.03
SE3	1	物事を、まわりの人の影響を受けずに自分一人で決めるのが苦手だ。	.74	-.16	-.11	.09	.01	3.13	1.19
SE5	8	自分の感情はまわりの人の影響を受けやすい。	.67	.06	.06	.05	.14	3.43	1.14
SE4	22*	他人の感情に流されてしまうことはない。	-.66	-.16	-.04	.14	-.05	2.73	1.01
<第2因子：他者指向的反応>									
EC5	12	悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。	-.06	.73	.08	.01	.04	3.83	0.92
EC3	3*	悩んでいる友達がいても、その悩みを分かち合うことができない。	.07	-.71	.05	.03	.12	2.33	0.92
EC2	14*	他人が失敗しても同情することはない。	-.09	-.68	.05	.07	.03	2.25	0.81
EC4	20	人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分には関係なくても応援したくなる。	-.01	.62	-.01	.12	.05	3.92	0.91
EC1	7	まわりに困っている人がいると、その人の問題が早く解決するといったと思う。	.01	.61	-.03	.09	.09	4.04	0.89
<第3因子：想像性>									
FA5	11	面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する。	-.06	.02	.80	-.08	-.01	3.69	1.15
FA3	25*	小説の中の出来事が、自分のことのように感じることはない。	.02	-.05	-.75	.05	.18	2.84	1.15
FA1	5	空想することが好きだ。	-.02	-.17	.68	.06	.02	4.00	0.97
FA4	24	自分に起こることについて、繰り返し、夢見たり想像したりする。	-.02	-.08	.62	.14	.15	3.42	1.13
FA2	18	感動的な映画を見た後は、その気分にならなってしまう。	.05	.26	.43	-.06	-.02	3.77	1.09
<第4因子：視点取得>									
PT3	9	自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする。	.01	.02	.00	.73	.04	3.64	0.90
PT4	17	人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。	-.01	.02	.02	.73	-.07	3.24	0.95
PT2	23	人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。	-.05	-.04	.02	.67	.08	3.73	0.92
PT1	4	常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている。	.10	.16	.11	.54	-.07	3.66	0.92
PT5	10*	相手を批判するときは、相手の立場を考えることができない。	.02	.01	.14	-.51	.11	2.89	1.05
<第5因子：自己指向的反応>									
PD3	13	他人の失敗する姿をみると、自分はそうなりたくないと思う。	-.21	.14	-.13	-.03	.82	3.93	0.86
PD4	19	苦しい立場に追い込まれた人を見ると、それが自分の身に起こったことでなくてよかったと心の中で思う。	.07	-.09	-.05	.00	.68	3.40	0.99
PD1	21	他人の成功を見聞きしているうちに、焦りを感じる人が多い。	.19	.12	.08	.00	.55	3.81	1.01
PD2	6	他人の成功を素直に喜べないことがある。	.04	-.19	.14	-.05	.50	3.17	1.03
因子間相関									
	F2	他者指向的反応	.14						
	F3	想像性	.21	.16					
	F4	視点取得	-.15	.30	.05				
	F5	自己指向的反応	.22	-.11	.22	-.14			

注1)*は逆転項目

Table 3 MES の再検査信頼性, 下位尺度間および他尺度との相関, 各尺度得点の平均値・標準偏差, α 係数

	他者指向 の反応	自己指向 の反応	被影響性	視点取得	想像性	<i>M</i>	<i>SD</i>	α	<i>n</i>
MES (多次元共感性尺度)									
他者指向の反応	.74**					3.84	0.61	.71	869(139)
自己指向の反応	-.11**	.69**				3.58	0.65	.60	869(140)
被影響性	.11**	.25**	.68**			3.18	0.79	.78	865(138)
視点取得	.36**	-.18**	-.14**	.74**		3.47	0.62	.69	862(137)
想像性	.16**	.21**	.18**	.07	.73**	3.61	0.73	.70	865(140)
IRI (対人反応性指標)									
共感的配慮	.57**	.02	.20*	.31**	.26**	3.53	0.52	.67	165
個人的苦痛	.05	.29**	.49**	-.12	.34**	3.38	0.59	.65	165
視点取得	.31**	-.24*	.06	.68**	-.06	3.21	0.56	.66	167
想像性	.12	.14	.11	-.04	.81**	3.36	0.81	.84	164
QMEE (情動的共感性尺度)									
感情の暖かさ	.59**	.04	.08	.20**	.29**	5.14	0.68	.66	342
感情の冷淡さ	-.58**	.17*	-.11	-.24**	-.06	2.94	0.71	.71	343
感情的被影響性	.27**	.17*	.68**	-.08	.20**	4.52	0.96	.67	344
自己意識尺度									
公的自己意識	.22*	.41**	.47**	.04	.35**	3.75	0.64	.85	174
私的自己意識	.25**	.07	-.06	.38**	.35**	3.65	0.61	.80	172
自己没入 (没入尺度より)	-.05	.35**	.22*	-.04	.56**	3.33	0.71	.86	141
自尊感情尺度	.04	-.13	-.31**	.08	-.01	2.87	0.70	.83	342
個人志向性・社会志向性 PN 尺度									
肯定的個人志向性	.13	-.22*	-.55**	.19	.08	3.17	0.72	.81	143
肯定的社会志向性	.51**	.06	-.05	.26*	.32**	3.76	0.52	.72	143
否定的個人志向性	-.14	-.01	-.42**	-.15	.06	2.97	0.60	.57	143
否定的社会志向性	.08	.32**	.60**	-.12	.23*	3.39	0.68	.76	144
愛他行動尺度									
経験頻度	.22*	-.08	-.07	.16	.02	2.12	0.40	.77	163
精神的負担	-.31**	.29**	.14	-.33**	.19	2.19	0.54	.89	162
Buss-Perry 攻撃性質問紙									
身体的攻撃	-.22*	.32**	.00	-.22*	.23*	2.85	0.96	.84	167
言語的攻撃	.01	.11	-.43**	.03	.03	3.00	0.67	.61	167
短気	-.16	.36**	.26**	-.30**	.27**	2.99	0.85	.74	166
敵意	-.17	.35**	.22*	-.19	.19	3.20	0.72	.76	168
社会的スキル尺度	.25**	-.23**	-.30**	.40**	-.07	3.09	0.55	.86	207
5 因子性格検査									
外向性	.32**	-.11	-.13	.17	-.04	3.21	0.80	.91	273
神経症傾向	.05	.13	.28*	-.02	.15	3.59	0.76	.90	267
開放性	.11	-.06	-.30**	.06	-.07	3.06	0.63	.84	270
誠実性	.04	.04	-.03	.05	-.12	2.89	0.63	.82	270
調和性	.17	-.12	.07	.15	-.04	3.27	0.62	.83	272
社会的望ましき尺度	.16	-.30**	-.05	.21*	-.21*	3.51	1.97	.54	206

注 1) ** $p < .001$ * $p < .01$ (データ数の大きさを考慮し, 5%水準で有意な係数には*を付けていない)

注 2) 太字の表記は再検査信頼性係数 (サンプルサイズはカッコ内に記載)

注 3) 社会的望ましき以外の尺度得点は合計得点を項目数で除算して算出。得点可能範囲は1-5(QMEE のみ1-7)。社会的望ましきの尺度得点は全項目の合計点で, 得点可能範囲は0-10。

注 4) 信頼性係数は 2 件法の社会的望ましき尺度のみ KR20 係数

MES の妥当性検討 (Table 3)

MES の妥当性検討にあたり, MES 以外の尺度についても, それぞれの尺度構成に従って尺度得点を求め, 平均値, 標準偏差, α 係数 (2 件法の SDS については KR20 係数) を算出した。各尺度得点の分布および MES 下位

尺度得点との散布図において, 特に大きな偏りや外れ値はみられなかったことから, ここで算出された尺度得点を今後の分析に用いることとした。

1. 他の共感性尺度との関連 IRI および QMEE との関係については, MES 他者指向的反応と IRI 共

感的配慮 ($r=.57$), QMEE 感情的暖かさ ($r=.59$) および感情的冷淡さ ($r=-.58$), MES 被影響性と QMEE 感情的被影響性 ($r=.68$), MES 視点取得と IRI 視点取得 ($r=.68$), MES 想像性と IRI 想像性 ($r=.81$) の間に有意な相関関係が認められた。IRI 個人的苦痛との関連については, MES 自己指向的反応が $r=.29$, MES 被影響性が $r=.49$ と, 関連の強さは異なるがいずれも正の相関関係を示した。

2. 他概念の尺度との関連 自己指向性の観点から関連すると予想された自己指向的反応と公的自己意識 ($r=.41$), 自己没入 ($r=.35$), 愛他行動の精神的負担 ($r=.29$), 敵意 ($r=.35$) がそれぞれ正に相関し, 関連しないと予想された愛他行動の経験頻度とは無相関 ($r=-.08$) であった。同様に, 想像性と公的自己意識 ($r=.35$), 私的自己意識 ($r=.35$), 自己没入 ($r=.56$) がそれぞれ正に相関し, 関連しないと予想された愛他行動経験 ($r=.02$) とは無相関であった。

他者指向性の観点からは, 他者指向的反応と肯定的社会志向性 ($r=.51$), 愛他行動経験 ($r=.22$) および負担 ($r=-.31$), 身体的攻撃 ($r=-.22$), 外向性 ($r=.32$) との間にそれぞれ有意な相関関係が認められた。関連しないと予想された自尊感情 ($r=.04$), 社会的望ましさ ($r=.16$) とは無相関であった。同様に, 視点取得と肯定的社会志向性 ($r=.26$), 愛他行動負担 ($r=-.33$), 身体的攻撃 ($r=-.22$), 短気 ($r=-.30$), 社会的スキル ($r=.40$) との間にそれぞれ有意な相関関係が認められた。

被影響性については, 自尊感情 ($r=-.31$), 肯定的個人志向性 ($r=-.55$), 否定的個人志向性 ($r=-.42$), 否定的社会志向性 ($r=.60$), 言語的攻撃 ($r=-.43$), 社会的スキル ($r=-.30$), 神経症傾向 ($r=.28$) との間に有意な相関関係が認められた。関連しないと予想された愛他行動に関しては, 経験頻度 ($r=-.07$) とも精神的負担 ($r=.14$) とも無相関であった。

この他, 他者指向的反応と短気 ($r=-.16$), 敵意 ($r=-.17$), 調和性 ($r=.17$), 視点取得と愛他行動経験 ($r=.16$), 敵意 ($r=-.19$), 想像性と愛他行動負担 ($r=.19$) など, 弱かったものの予想と一致する方向の関連もみられた。ただし, 他者指向的反応と言語的攻撃 ($r=.01$), 自己指向的反応と私的自己意識 ($r=.07$), 視点取得と自尊感情 ($r=.08$), 言語的攻撃 ($r=.03$) は予想に反して関連がみられなかった。

なお, MES の各下位尺度得点の性差については, 他者指向的反応 ($t(867)=4.20, p<.001$), 被影響性 ($t(863)=3.77, p<.001$), 想像性 ($t(863)=2.81, p<.01$) において, いずれも女性の方が男性よりも有意に高い得点を示し

た。自己指向的反応 ($t(867)=0.78, ns$) および視点取得 ($t(860)=0.02, ns$) においては, 男女差はみられなかった³。

考 察

本研究では, 共感性の多次元的アプローチに従い, 他者の心理状態に対する認知・情動の反応傾向を測定する多次元共感性尺度 (MES) を作成した。その目的は, 現在利用されている尺度では, 情動面においても認知面においても「他者指向—自己指向」という反応傾向の指向性が明確に弁別されていないため, この問題を解消する下位尺度を設定することであった。他者の苦痛に限定せず快感情も含めた応答の所産傾向である「他者指向的反応」と「自己指向的反応」, 他者の心理状態に対する素質的な影響の受けやすさ (並行的所産傾向) である「被影響性」, 他者指向的な認知傾向の「視点取得」と自己指向的な認知傾向の「想像性」, の5下位概念が因子分析により分類された。各下位尺度と尺度全体の構成にはおおむね満足できる信頼性と妥当性が確認され, 性格特性としての共感性を多面的に理解する上で役立つと考えられる。

既存の共感性尺度との関連

既存の共感性尺度とは, 対応する下位尺度との間に $r=.57\sim.81$ と比較的高い相関関係が示された。最も相関の高かった想像性は, 2項目を IRI から援用したことによると考えられるが, その他は1項目が類似である程度の項目構成である。中心的な下位概念である他者指向的反応は IRI 共感的配慮と $r=.57$, QMEE 感情的暖かさと $r=.59$, QMEE 感情的冷淡さと $r=-.58$ であったが, 信頼性の希薄化修正後はそれぞれ .83, .87, -.82 であり, 本尺度の有用性を支持するものと考えられる。

指向性の弁別に関する検討

指向性の弁別に関しては, 下位尺度間についての相関分析の結果から, 「他者指向」の他者指向的反応と視点取得, 「自己指向」の自己指向的反応と想像性の間に有意な正の相関関係が認められた。他概念との関連に

³ M は男性, 女性の順に, 他者指向的反応で 3.75, 3.92, 被影響性で 3.07, 3.27, 想像性で 3.53, 3.67, 自己指向的反応で 3.60, 3.56, 視点取得で 3.47, 3.47 であった。 t 検定の結果は過去の知見に整合的であったが, 注目すべき大きな性差は認められず, 本研究では性差の検討が主目的ではないため, 男女ごみの相関分析結果を報告した。男女別の相関分析では, いずれかの群のみ有意な相関関係を示す結果もみられたが, 両群が有意に反対方向の関連を示す結果は認められなかった。具体的な係数は, 筆頭著者に請求していただくことにより入手できる。

においては、一方で「自己指向」の下位尺度はいずれも自己フォーカスの強さを表す公的自己意識や自己没入、他者への攻撃性を表す身体的攻撃や短気と正に、社会的望ましさと負に相関し、愛他行動の経験頻度とは無相関を示した。他方で「他者指向」の下位尺度はいずれも社会適応を自己概念形成基準としていることを示す肯定的社会志向性、円滑な社会的相互作用に求められる社会的スキルと正の、身体的攻撃や愛他行動の精神的負担とは負の相関を示した。これらの結果から、指向性の弁別が可能な共感性尺度が構成されたといえる。これは想像性の概念的的位置づけについての仮定を満たす結果でもある。

ただし、自己意識との関連についてはさらなる考察を要する。自己指向的反応と私的自己意識との無相関や、逆に、他者指向的反応と公的自己意識との正の相関は、IRIでも同様にみられる（例えば、Davis, 1983a; Davis & Franzoi, 1991）。加えて、本研究ではさらに私的自己意識が他者指向的反応や視点取得とも正の相関を示した。押見（1992）は、公的自己意識の高い者は社会的アイデンティティを重視し、自己主張を強くせず、相手に合わせる行動傾向を有すると報告しており、この知見に従えば他者指向的反応が公的自己意識と正に相関することは納得のいくものである。また、私的自己意識の高い者は自己の身体感覚や感情、動機、思考などの私的側面に関して積極的に情報処理を行い、それによって対人行動をとるといえる。ならば他者指向的な認知傾向（視点取得）の高さから他者指向的な感情（他者指向的反応）を経験し、それに基づいて他者指向的な行動（愛他行動）を示す者の私的自己意識が高いとの解釈は可能である。従って、自己意識は Davis (1983a; Davis & Franzoi, 1991) が自己指向性の観点から重視してきた概念であるため取り上げたが、指向性の弁別を検討するための測度として適当であるのか疑問を呈する結果といえる。

これに類することが、社会的望ましさと視点取得との関連でもいえる。社会的望ましきの尺度は、社会的に承認されるような方向へ回答を歪める反応傾向というより、本当に社会的に望ましいとされる人格特性を測定しているとの指摘がなされることがある。例えば社会的スキル尺度を作成した Riggio (1986) は、社会的主張や社会的統制のスキルとは正に相関し、逆に社会的感受性や社会的操作のスキルとは負に相関した結果を、社会的望ましき尺度は社会的スキル尺度と同様に対人関係における如才のなさを測定している部分があるためであると結論づけている。本研究において自己

指向的反応や想像性とは有意な負の相関関係がみられたことも、これを支持するものかもしれない。承認欲求に基づく回答傾向の歪みに関しては、今後は人格検査などに含まれる虚偽尺度を利用するなど、別の側面からの検討も必要といえよう。

向社会的行動研究の領域で注目されている愛他性や攻撃性、社会的スキルとの関係については、以下のようによまとめられる。「他者指向」の下位尺度は、社会的スキルと正の、愛他行動負担や身体的攻撃とは負の相関を示した。この他、他者指向的反応は愛他行動経験と正に相関し、視点取得は短気と負に相関していた。これらの結果は、共感性を向社会的な傾向を促進し、反社会的な傾向を抑制する要因とする知見（Eisenberg & Miller, 1987; Miller & Eisenberg, 1988）に整合的である。また、自己指向的反応が愛他行動負担と正の、社会的スキルと負の相関を示し、「自己指向」の下位尺度は愛他行動経験とは無相関であった結果は、向社会的行動には利己的な動機も存在するが愛他的な動機が真に重要であるとする Batson の主張（例えば Batson et al., 1983）に沿うものである。「自己指向」の下位尺度は身体的攻撃や短気と正に相関し、自己指向的反応はさらに敵意とも関連していたことも、共感性の指向性を弁別する重要性を示唆する結果といえよう。

被影響性に関する検討

本研究では、他者の心理状態に対する素質的な反応傾向の被影響性も下位尺度に含めた。他者指向的反応よりも、自己指向的反応との関連の方がやや強かった結果から、並行的所産の定義を考慮して自己指向的でも他者指向的でもない下位尺度を作成するという当初の目的が十分に達成されたとはいえない。しかしながら、5 因子性格検査の神経症傾向が被影響性とのみ正に相関した結果は、この下位尺度が気質的な情動性を測定していることを支持するものである（Eysenck & Eysenck, 1985 参照）。また、IRI の PD 尺度との間に比較的高い正の相関関係がみられたことから、以下のように推察できる。

被影響性は、対人不安が随伴する公的自己意識、抑うつ、危険因子とみなされる自己没入、自我の弱さからくる対人関係の未熟さを捉える否定的社会志向性などと正に相関していた。逆に、自尊感情、個性を尊重し主体的に行動する傾向を表す肯定的個人志向性、利己主義や自己愛を根底とする否定的個人志向性、5 因子性格検査の開放性などとは負の相関を示した。これらの結果は、被影響性が対人不安の高さや自己主張のなさを背景とした他者の心理状態に対する影響の受け

やすさを測定していることを示すものである。

一方、IRIのPD尺度もネガティブな情動性と強く関連し、自尊感情とは負の相関を示す (Davis, 1983a, 1994)。登張 (2003) は項目内容から IRI の PD 尺度を QMEE の感情的被影響性と同じ次元に位置づけており、谷田・山岸 (2004) も両者が一つの因子を構成した分析結果を報告している。これらを考え合わせれば、IRI の PD 尺度は自己指向的な応答の所産傾向というよりはむしろ被影響性に近い傾向を測定していることが示唆される。

情動的な気質をもつ者は肯定的な刺激には必ずしもすぐ反応せず、否定的な刺激に対してのみ強く覚醒されるという Buss & Plomin (1975) の主張に従えば、否定的な情動性を共感性の枠組みの中で測定することは意義深い。この反応傾向から自動的に何らかの対人行動がとられるとは考えにくい、自我状態や認知能力といった個人的な要因や環境などによって愛他的あるいは利己的な応答の所産が導かれ、それが社会的行動につながるということが示唆されている (Davis, 1994)。従って、今回、自己指向の反応と被影響性に分けて下位尺度を設定できたことは、今後の共感性研究に新たな知見を提供する可能性を開いたといえよう。

今後の課題

今後の主な課題としては、認知・情動反応傾向の指向性を規定している要因の検討が挙げられる。例えば、伊藤 (1995, 1998) は、社会志向性が周囲に合わせることをよしとする「否定的社会志向性」から周囲との調和や社会貢献を重んじる「肯定的社会志向性」へ、人格の成熟に伴い移行すると指摘している。本研究では、MESの「自己指向」の下位尺度は前者と関連し、「他者指向」の下位尺度は後者と関連することが見出された。従って、自己指向的な認知・情動反応傾向を他者指向的な認知・情動反応傾向の前段階と捉え、自我発達との関連を検討することなどは候補となろう。また、他者評定や実際の社会的行動の観察などによって、MESにより測定される共感性の妥当性を発展的に検討していくことも必要であろう。

引用文献

明田芳久 (1999). 共感の枠組みと測度：Davisの共感組織モデルと多次元共感性尺度 (IRI-J) の予備的検討 上智大学心理学年報, **23**, 19-31. (Aketa, Y. (1999). On a framework for and measures of empathy: An organizational model of empathy by Davis, and a preliminary study

of a multidimensional empathy scale (IRI-J). *Psychological Report of Sophia University*, **23**, 19-31.)

安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392. (Ando, A., Soga, S., Yamasaki, K., Shimai, S., Shimada, H., Utsuki, N., Oashi, O., & Sakai, A. (1999). Development of the Japanese version of the Buss-Perry Aggression Questionnaire (BAQ). *Japanese Journal of Psychology*, **70**, 384-392.)

Batson, C. D. (1987). Prosocial motivation: Is it ever truly altruistic? In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 20 (pp. 65-122). New York: Academic Press.

Batson, C. D., O'Quin, K., Fultz, J., Vanderplas, M., & Isen, A. M. (1983). Influence of self-reported distress and empathy on egoistic versus altruistic motivation to help. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 706-718.

Buss, A. H., & Plomin, R. A. (1975). *A temperament theory of personality development*. New York: John Wiley & Sons.

Davis, M. H. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, **10**, 85.

Davis, M. H. (1983a). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.

Davis, M. H. (1983b). The effects of dispositional empathy on emotional reactions and helping: A multidimensional approach. *Journal of Personality*, **51**, 167-184.

Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. Madison, WI: Brown & Benchmark. (デイヴィス, M. H. 菊池章夫 (訳) (1999). 共感の社会心理学 川島書店)

Davis, M. H., & Franzoi, S. L. (1991). Stability and change in adolescent self-consciousness and empathy. *Journal of Research in Personality*, **25**, 70-87.

- Davis, M. H., Hull, J. G., Yong, R. D., & Warren, G. G. (1987). Emotional reactions to dramatic film stimuli : The influence of cognitive and emotional empathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 126-133.
- Eisenberg, N., & Miller, P. A. (1987). The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological Bulletin*, **101**, 91-119.
- Eisenberg, N., & Strayer, J. (Eds.) (1987). *Empathy and its development*. Cambridge, UK : Cambridge University Press.
- Eysenck, H. J., & Eysenck, M. W. (1985). *Personality and individual differences : A natural science approach*. New York : Plenum Press.
- 伊藤美奈子 (1993). 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **64**, 115-122. (Ito, M. (1993). Construction of a individual and social orientedness scale and its reliability and validity. *Japanese Journal of Psychology*, **64**, 115-122.)
- 伊藤美奈子 (1995). 個人志向性・社会志向性 PN 尺度の作成とその検討 心理臨床学研究, **13**, 39-47. (Ito, M. (1995). A study on the construction of individual and social PN orientedness scale. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, **13**, 39-47.)
- 伊藤美奈子 (1998). 人間の発達をとらえる際の2志向性概念の提唱 心理学評論, **41**, 15-29. (Ito, M. (1998). A proposal of two-orientedness : A viewpoint on human development. *Japanese Psychological Review*, **41**, 15-29.)
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動の共感性の特質 筑波大学心理学研究, **2**, 33-42. (Kato, T., & Takagi, H. (1980). Characteristics of the emotional empathy in adolescence. *Tsukuba Psychological Research*, **2**, 33-42.)
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する一向社会的行動の心理とスキルー 川島書店
- 北村俊則・鈴木忠治 (1986). 日本語版 Social Desirability Scale について 社会精神医学, **9**, 173-180.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. (1972). A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, **40**, 525-543.
- Miller, P. A., & Eisenberg, N. (1988). The relation of empathy to aggressive and externalizing/antisocial behavior. *Psychological Bulletin*, **103**, 324-344.
- 押見輝男 (1992). 自分を見つめる自分—自己フォーカスの社会心理学— サイエンス社
- Riggio, R. E. (1986). Assessment of basic social skills. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 649-660.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.
- Rushton, J. P., Chrisjohn, R. D., & Fekken, G. C. (1981). The altruistic personality and the Self-Report Altruism Scale. *Personality and Individual Differences*, **2**, 293-302.
- 坂本真士 (1997). 自己注目と抑うつつ社会心理学 東京大学出版会
- 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて— 奈良教育大学紀要 (人文・社会), **37**, 149-154. (Sakurai, S. (1988). The relationship between empathy and helping behavior in college students. *Bulletin of Nara University of Education (Cultural and Social Science)*, **37**, 149-154.)
- Shafer, A. B. (1999). Factor analyses of Big Five Markers with the Comrey Personality Scales and the Howarth Personality Tests. *Personality and Individual Differences*, **26**, 857-872.
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188. (Sugawara, K. (1984). An attempting to construct the Self-Consciousness Scale for Japanese. *Japanese Journal of Psychology*, **55**, 184-188.)
- 鈴木有美・木野和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷福子・谷口ゆき・野田勝子 (2000). 多次元共感性尺度作成の試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **47**, 269-279. (Suzuki, Y., Kino, K., Deguchi, T., Tohyama, T., Deguchi, T., Ida, K., Ohtani, F., Taniguchi, Y., & Noda, K. (2000). A measure of empathy : A multidimensional approach to the structure and measurement of trait empathy. *Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sci-*

- ences), **47**, 269-279.)
- 谷田林士・山岸俊男 (2004). 共感が社会的交換場面における行動予測の正確さに及ぼす効果 心理学研究, **74**, 512-520. (Tanida, S., & Yamagishi, T. (2004). The effect of empathy on accuracy of behavior prediction in social exchange situation. *Japanese Journal of Psychology*, **74**, 512-520.)
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148. (Tobari, M. (2003). The development of empathy in adolescence : A multidimensional view. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **14**, 136-148.)
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67. (Wada, S. (1996). Construction of the Big Five Scales of personality trait terms and concurrent validity with NPI. *Japanese Journal of Psychology*, **67**, 61-67.)
- Wispè, L. (1986). The distinction between sympathy and empathy : To call forth a concept, a word is needed. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 314-321.
- (2007.10.3 受稿, '08.6.23 受理)

Development of the Multidimensional Empathy Scale (MES) : Focusing on the Distinction Between Self- and Other-Orientation

YUMI SUZUKI (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION AND HUMAN DEVELOPMENT, NAGOYA UNIVERSITY) AND KAZUYO KINO (FACULTY OF PSYCHOLOGICAL SCIENCE, HIROSHIMA INTERNATIONAL UNIVERSITY) *JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 2008, 56, 487-497

In the context of recent developments in the measurement of individual differences in empathy, the present study proposes an integrated conceptual framework for assessing empathy as multidimensional personality dispositions. Preliminary examination resulted in the development of the Multidimensional Empathy Scale (MES), a 24-item self-report measure of 5 dimensions of empathy, for distinctively assessing self/other-orientation of either cognitive or emotional components. As hypothesized, factor analysis revealed 5 distinct factors : (a) Other-Oriented Emotional Reactivity, (b) Self-Oriented Emotional Reactivity, (c) Emotional Susceptibility, (d) Perspective Taking, and (e) Fantasy. In a series of validation studies in which undergraduate students participated, each of the 5 subscales was shown to display a predictable pattern of relationships with existing scales and other hypothetically related indices. These findings, coupled with the theoretically important relationships existing among the 5 subscales themselves, suggest that the Multidimensional Empathy Scale could prove to be a valuable tool for research in personality and social psychology, and for work in applied settings.

Key Words : empathy, self- and other-orientation, multidimensional scale, test reliability, test validity